

神代川かわまちづくり ～歴史，ひと，まちをつなぐ河川再生事業～

宮崎県 県土整備部 河川課

1. はじめに

宮崎県高千穂町は、^{たかまがはら}高天原神話と天孫降臨神話の舞台として、日本文化の根源に位置している。町の中心を流れる^{じんだいがわ}神代川流域は、「^{くましろ}神代」の名も示すように、日本発祥の地として事業地の周辺に「^{あまのまない}天真名井」，「^{しおうじがつか}くしふる峯」，「^{しおうじがつか}四皇子塚」など、『古事記』，『日本書紀』に登場する多くの地を含む。この地域は、いわば日本の原風景であり、中でも、くしふる峯の麓に差しかかる所に位置する天真名井は、ニギノミコトが水のなかった国土に天から「水の種」をもたらしたことで湧いた泉である、との伝承が残っている（図－1）。

「神代川かわまちづくり」は、河川改修で変貌してしまった古代からの環境と景観の再生をキーワードに、神話で彩られた高千穂町のまちづくりと一体になって進めた事業であり、令和6年10月に天真名井周辺の河川整備が完成を迎えた。

本稿では、神話の里・高千穂を流れる神代川と日本人の心の再生を目指して取り組んだ河川再生事業について紹介する。

2. 神代川かわまちづくりの概要

神代川は、宮崎県高千穂町浅ヶ部に端を発し、高千穂市街地を貫流し、一級河川・五ヶ瀬川に流



図－1 神代川周辺の史跡や神社

入する流路延長 3.0 km の河川である（図－2）。

かつての神代川は自然豊かで、子供たちが水遊びや魚取りに興じる姿が見られた。また、中流の川沿いにある天真名井からは、豊富な地下水が湧き出ていた。この天真名井は、古事記で「^{あめのむらくものみこと}天村雲命が^{あまてらすおおみかみ}高天原の天照大神により授かった水の種を神代川の畔に置いたことで湧き出てきた」と伝えられており、御神水として信仰されてきた。

しかし、昭和47年の河川災害関連工事により、蛇行していた河道は直線化され、土羽法面・岩河床だった断面は掘削され、コンクリート三面

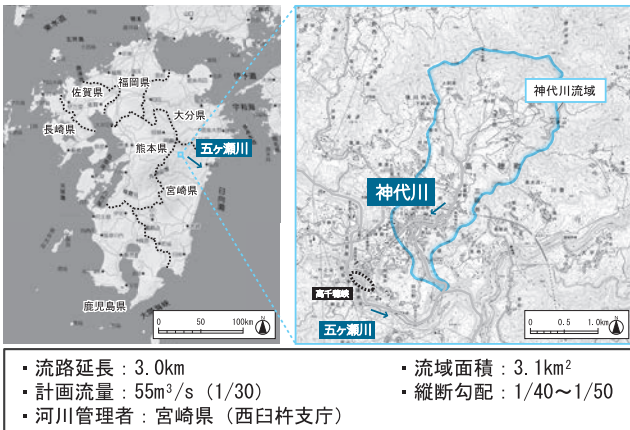


図-2 神代川の位置及び諸元

張となった（図-3）。

この工事で治水の問題は改善されたが、生物の生息環境、昔ながらの景観・利用が失われ、魚も子供たちも川から遠ざかってしまった（写真-1）。

「神代川かわまちづくり計画」は、神代川及びその周辺におけるかわまちづくりの基本理念（図-4）や整備方針、内容等を取りまとめたもので、行政・地域住民・学識経験者・NPO 法人な



昭和30年代の神代川で遊ぶ子供たち 昭和47年河川改修後の神代川

写真-1 改修前後の神代川

どから構成される「神代川かわまちづくり推進協議会」（住民参加型WS。以下、「協議会」という）と、主に学識経験者と地域住民代表から構成される「神代川河川再生計画検討委員会」（委員長：宮崎大学 杉尾名誉教授。以下、「委員会」という）での議論を踏まえて、平成26年1月に策定されたものである（図-5）。

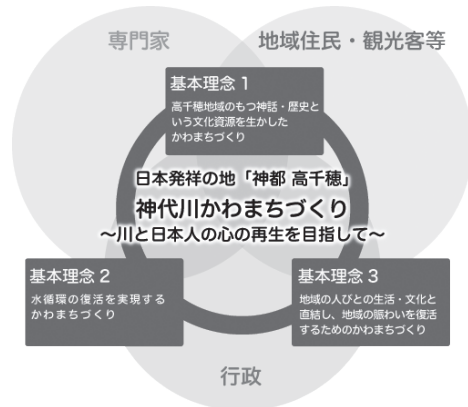


図-4 「神代川かわまちづくり」基本理念

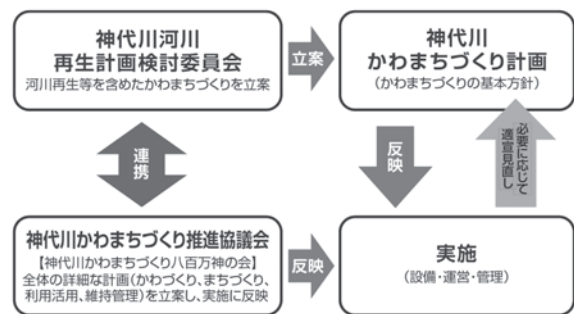


図-5 学識経験者と地域住民代表による検討会と住民参加型ワークショップの位置付け及び役割

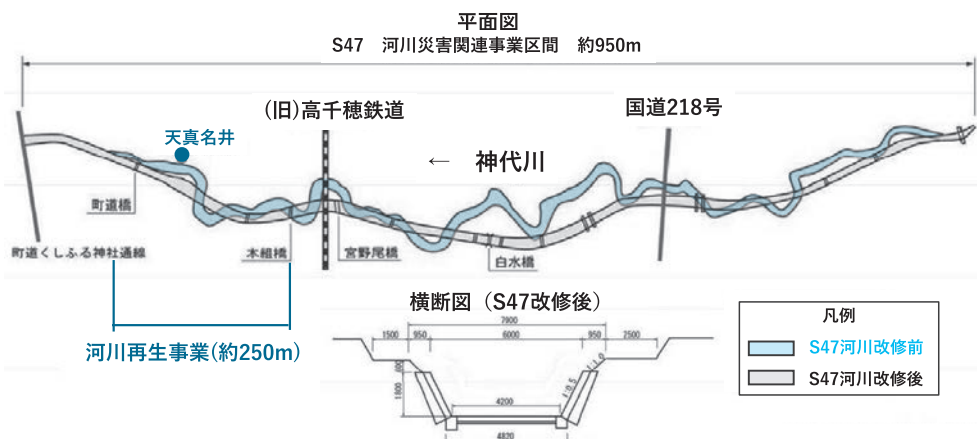


図-3 河川改修前後の平面図及び改修後横断面図（昭和47年）

この計画を基に、宮崎県・高千穂町・地域住民・委員会・協議会が連携して、神代川の再生を機に、地域の人々が川とともに生きることの喜びを取り戻し、また地域を訪れる人々が日本文化の原風景を体験できるように、川とまちを一体としたさまざまな取組を行ってきた。今回の河川再生事業（以下、「本事業」という）は、本県が取り組む“天真名井周辺・神々のゾーン”（図-6）の河川環境整備である。

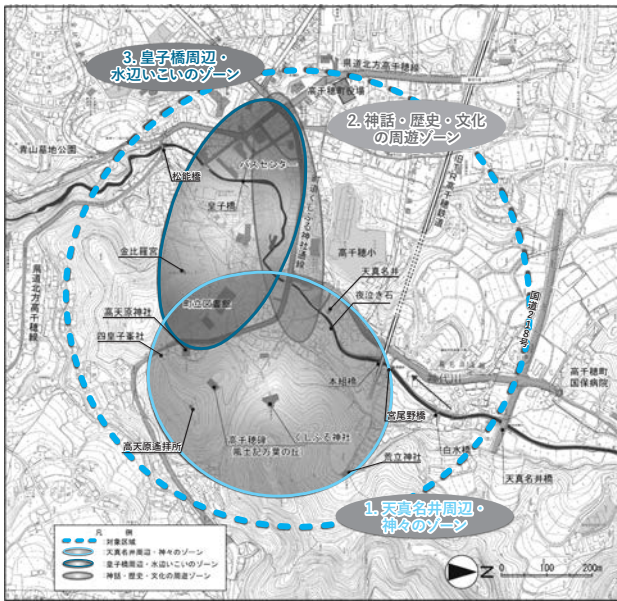


図-6 「神代川かわまちづくり」ゾーニング

3. 本事業のポイント

本事業では、「神代川かわまちづくり計画」の基本理念等を踏まえて、“①昔のような川の姿への再生”と“②人と川の関係性の再生”を事業コンセプトとし、そのコンセプトを実現するためのポイントと具体の整備内容を次のとおりとした（図-7）。

- ・河道の蛇行（落差工やワンドを配置し、昔の蛇行した川の姿を再生することで、生物生息環境を創出）
- ・河床・護岸の改良（阿蘇の溶結凝灰岩をイメージした擬岩コンクリート河床と自然石積護岸を整備）
- ・緑地公園の整備（管理用通路を散策路として整備し、休憩施設を配置）

(1) 模型作成による関係者とのイメージ共有

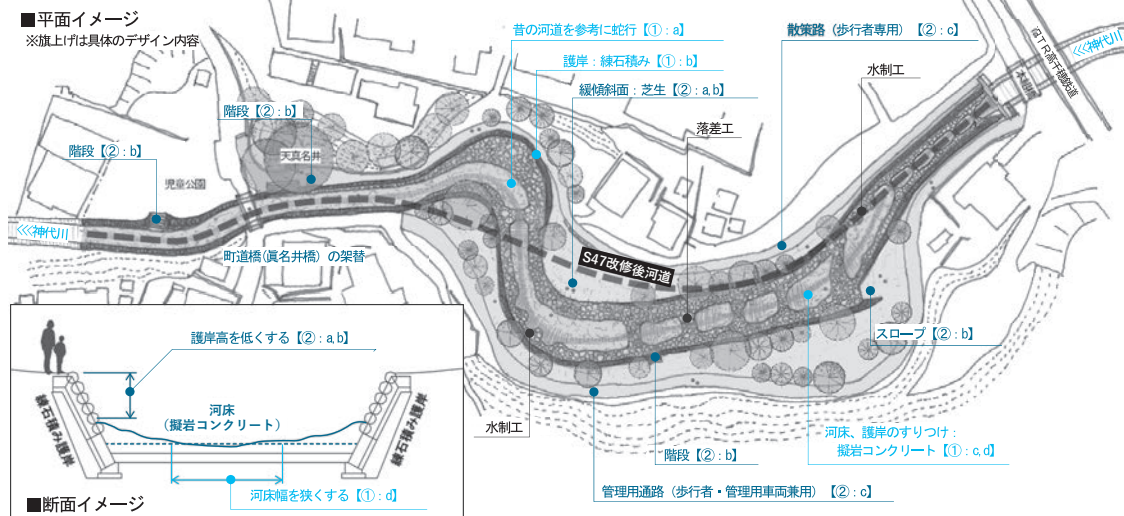
具体の整備内容については、景観、水理、施工用の3種類の模型を作成し、委員会（平成26～令和6年までに計20回開催）、協議会（同計30回開催）で地域住民と意見交換しながらイメージを

■整備のポイント ※文字の色と通し番号・アルファベットは下図の旗上げとリンク

- | | | |
|---|---|--|
| <p>【前提】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・計画流量を安全に流下可能な河道にする | <p>【①：昔のような川の姿への再生】</p> <ol style="list-style-type: none"> 河道を蛇行させる 自然素材の利用する 昔ながらの景観をつくる 平常時の水量が多く感じられるようにする | <p>【②：人と川の関係性の再生】</p> <ol style="list-style-type: none"> 川を近くに感じられるようにする 安全に川に近づけるようにする 気持ちよく散策できるようにする |
|---|---|--|

■平面イメージ

※旗上げは具体のデザイン内容



■断面イメージ

図-7 整備のポイントとデザイン内容（平面イメージ）

共有し、設計・施工に反映させた(写真-2, 3)。

特に、本事業は直線的な川を本来の姿へ再生することが重要であったため、大きく蛇行させて昔の河道形状へ近づけること、加えて、昔のように人と川の距離を近づけるため、河川の拡幅や護岸・河床の抜本的な改良を行った。

このため、委員会の委員である河川工学の学識経験者(九州大学 島谷名誉教授, 佐藤准教授)と協議し、まず環境・景観・利用の観点から景観模型を作成し、理想的な河道形状の検討を行った。次に、護岸や河床の構造、散策路や階段、スロープ、ベンチ、河畔林の配置を景観模型に反映させ、その後、設定した河道形状の流下能力を水理模型実験により検証するという、通常とは逆の流れで進めた。



写真-2 景観模型を見ながら意見交換



写真-3 水理模型実験による検証



写真-4 施工用模型による完成イメージ共有

水理模型実験の結果、水衝部*での溢水防止や下流の負担軽減を目的とした水制工や落差工を配置することとなった。

また、護岸、河床の整備に当たっては、施工用模型を作成し、施工業者や地域住民と設計思想、完成イメージを共有することにより、複雑な形状や起伏などの微妙なニュアンスを施工に反映させることができた(写真-4)。

*増水時に、護岸や堤防に当たる水の流れが特に強いところ。

(2) 試験施工、現地見学会による検討

本事業では、神話の里を流れる河川らしく、厳かさを表現したり、水生生物や植物が生息できる構造等を現地で確認したりするため、試験施工や現場見学会を開催した。自然石積工や水制工の工法・材料の選定に当たっては、現場見学会において、地域住民にアンケート調査を行い、意見を踏まえて採用するなど、住民との協働によるかわづくりを実践することができた(図-8, 写真-5)。

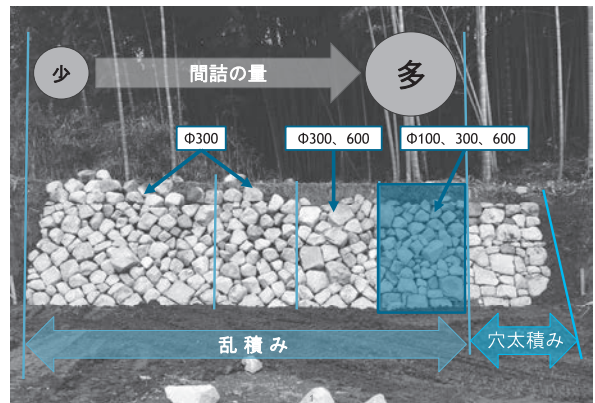


図-8 自然石積工の選定 試験施工



写真-5 巨岩水制工 現場見学会

また、河床については、現在のコンクリート三面張に改修する前が岩や石、砂であったため、掘削して岩が出る所はそのまま天然の岩河床として昔の姿を再生し、岩が確認できない所は岩盤を模したコンクリート（擬岩コンクリート）で修景するとともに、水の流れに変化を与えることとし、こちらも試験施工や住民アンケート調査を行い、神代川周辺で確認できる天然の岩盤を参考に、材料、形状等を決定した（図－9）。

(3) 夜泣き石、管理用通路・植栽等の検討

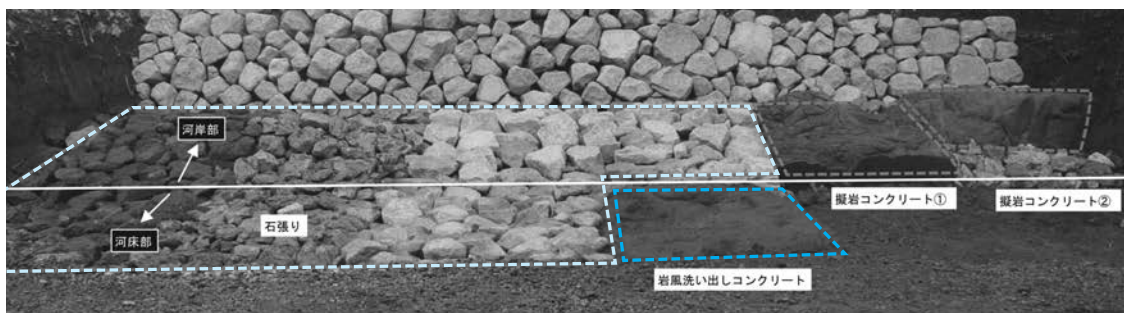
村に災いがある時、神代川にある石が夜泣きして知らせたことから「夜泣き石」といわれている石があり、コンクリート三面張への改修時には河川から離れた場所に移されていた。今回の改修に合わせて、新しい管理用通路付近のアイススポット

となる位置へ復元を行った。

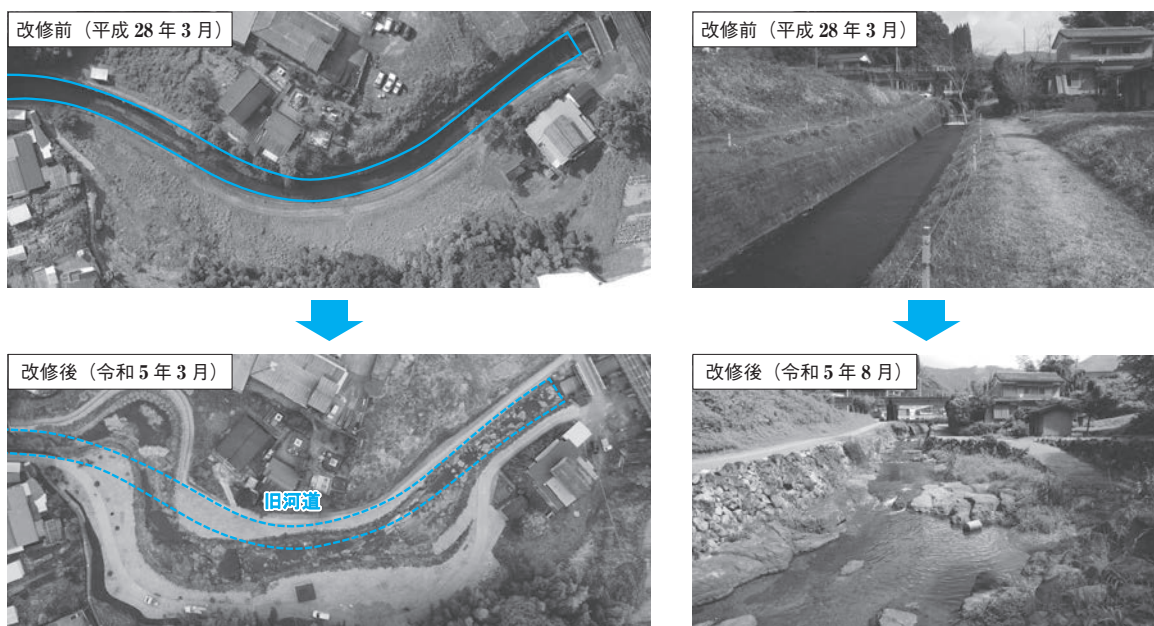
管理用通路は、周辺の史跡や観光スポット等を巡る周遊路としての役割を有していることから、周辺となじみが良く耐久性に優れた洗い出しコンクリートとした。

(4) 昔のような川の姿への再生（令和6年10月5日竣工）

これまでの委員会、協議会での模型を使った議論、試験施工や現場見学会における検討結果を踏まえながら整備を進め、天真名井周辺・神々のゾーンの神代川河川再生事業が昨年10月に竣工した（図－10）。竣工後も以前と同様の水量確保や水質の改善に向け環境調査等を行っており、生態系の回復状況と合わせて、モニタリングを継続することになっている。



図－9 河床整備工法の選定 試験施工



図－10 改修前後の比較

4. おわりに

本事業は、神代川が「地域の人々が誇れる川」へ再生することが大きな目標であるが、事業開始後から効果が現れている。

一つ目は、昔の姿を知る地域住民が、再生計画等の策定から竣工までの間、委員会や協議会に参加し、さまざまな関係者と議論することにより、神代川の河川美化のため、主体的に維持管理を行うなど、かわづくりやまちづくりに積極的に関わる意識が醸成されていることである。整備の中心である天真名井周辺では、地元公民館女性部による定期的な河川清掃が長年行われており、その功績が認められ、県知事表彰を受けている（写真－6）。



写真－6 地元公民館女性部による河川清掃

二つ目は、未来を担う子供たちの変化である。近隣の学校（高千穂小学校）の児童たちによる記念植樹、更には工事現場でフィールドワークを実施するなど（写真－7）、施工段階からかわまちづくりに関心を持たせ、河川再生事業の取組を通じて、川と神話や歴史、人との関係性、町の将来を考えるよう、人材育成に取り組んできた。

これらの取組によって、当初は興味を示さなかった児童たちが、回数を重ねるにつれて自分たちの意見を積極的に発言するようになり、どうすれば神代川が良くなるか等の提案が出てくるなど、地域への愛着が湧いてきている（写真－8）。



写真－7 児童たちのフィールドワーク



写真－8 児童たちが描いた神代川デザイン

将来、この子供たちがさまざまな視点で、神代川の観光資源としての魅力を引き出してくれることを期待したい。

本事業は、「昔のような川の姿への再生」と「人と川の関係性の再生」を目指して整備を進めてきた。今後とも、神代川が古代から受け継がれてきた歴史や文化を継承しつつ、地域のにぎわいの創出に寄与するよう、これまでと同様に地域住民との情報共有と意見交換を重ねながら、関係機関と連携してかわまちづくりを推進していきたい。

謝辞：「神代川かわまちづくり」については、計画策定から施工までの各方面において、ご尽力をいただいた学識経験者、地域住民、設計測量コンサルタント、施工業者、国・県・市町村の各行政機関、NPO 法人等、多くの関係者のご協力により、完成を迎えることができたものである。これら関係者全ての方々に感謝を申し上げるとともに、「神話・歴史という文化的資源を更に活かして、地域のにぎわいを復活させる」ため、今後とも変わらぬご指導・ご助言を賜りたいと考えている。